

海を渡り、山を越えて

—松原田中遺跡からみた弥生～古墳時代の地域間交流—

鳥取県埋蔵文化財センター 小山 浩和



図12 地中梁を伴う布掘建物の比較



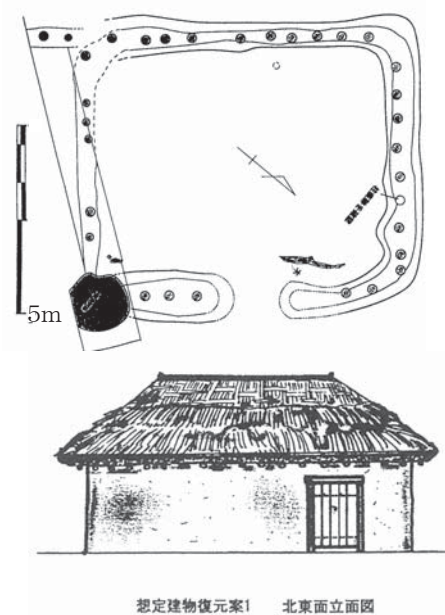
図13 松原田中遺跡の大壁建物



※以下の文献をもとに作成
青柳泰介 2003 『大壁建物』再考『橿原考古学研究所論集第14号』
青柳泰介 2016 『大壁建物』研究の現状と課題および展望『由良大和古代文化研究会研究紀要』第20集

● 1～3棟
● 10棟前後
● 30棟以上

図14 古墳時代の大型壁建物の分布



想定建物復元案1 北東面立面図
滋賀県埋文ニュース第232号より転載

1. はじめに

出土品から交流の実態に迫るためには、遺構や出土品から「交流のあかし」となるモノ（搬入品・技術・情報）の動態を把握することが重要である。今回はこうした手がかりが多く得られた鳥取市松原田中遺跡の調査成果を通じて、弥生時代から古墳時代の各地との交流の実態に迫ってみたい。

2. 遺跡の概要

鳥取市松原に所在する松原田中遺跡は、湖山池南西部の低地にあり、縄文時代晩期までに形成された微高地上に立地する。弥生時代前期末頃から人々が住み始め、主に弥生時代中期～古墳時代前期と、古墳時代後期に栄えたムラの跡である。これまでにムラの西側に水田が（金沢坂津口遺跡）、東側の丘陵上には墓域（松原古墳群等）があったことが明らかとなった。



(南から湖山池を望む)



図1 松原田中遺跡の全体像

3. ムラの生業

①玉づくり（弥生中期）

ヒスイ製勾玉づくり…ヒスイ製勾玉の未成品が出土したことから、勾玉づくりが行われていたことが明らかとなった。→ヒスイは新潟県糸魚川産か？



図2 松原田中遺跡出土玉作関連遺物

碧玉製管玉（くだたま）づくり…碧玉製管玉の未成品や、製作時に微細な剥片類が出土した。また、石材の産地分析の結果、以下のことが明らかとなった。

⑤大壁建物（古墳後期）

松原田中遺跡において2棟検出した。倉吉市の夏谷遺跡に次ぐ発見例となる。うち1棟は、梁行3m×桁行7.3mの規模で、溝内に角柱が90cmおきに立ち並ぶ。類例は奈良盆地南部と滋賀県大津市周辺の古墳時代中～後期の遺跡にて多くみつかっており、文献や出土遺物から渡来系氏族との関連が指摘されている。一方、松原田中遺跡では、中国や朝鮮半島系の遺物は希薄であることから、畿内において定着した建築様式が2次的に波及したものと考えられる。

5. まとめ

調査の結果、集落内で玉や石器、木製品といった多様なものづくりが行われており、こうした手工業が素材や技術の供給、デザインの共有等、他地域との交流により成り立っていたことが指摘できる。特に弥生時代中期における九州から北陸、南は紀州や四国に及ぶ地域間交流において、松原田中遺跡が主導的な役割を果たしていた可能性がある。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、僅少な鉄器の出土量からみて、こうした主導的役割は他遺跡へ移った可能性があるが、布掘建物や多種多様な木製品の出土や、大壁建物の存在等からみて、古墳時代も地域間交流を担う一員としての役割を果たしたと考える。

鳥取西道路関連遺跡調査成果の速報展のおしらせ

鳥取県がこの約10年間総力を挙げて取り組んできた発掘調査の成果を一堂に会した展覧会を行います！

期間：2019. 2. 23 (土) ▶ 3. 17 (日)

会場：鳥取県立博物館 第3展示室

詳細は後日、当センターホームページ等をご覧ください。(http://www.pref.tottori.lg.jp/maibun/)



図3 管玉の穿孔

碧玉…石川県南部の小松市周辺産出の碧玉を使用した。
 石針…素材となるサヌカイトは四国の金山（かなやま）産。
 石鋸…素材となる片岩は中央構造線に沿って、四国を横断する吉野川沿いや、紀伊半島を横断する紀ノ川沿いに産出するが、分析の結果後者に近いことが明らかとなった。

②石器づくり（弥生中期）

石器の素材となるサヌカイトは、石材の産地分析の結果、四国の金山（かなやま）産と判明した。また、遺跡からサヌカイトの剥片やチップが多量に出土したことから、搬入されたサヌカイトを、ムラの中で加工したことが明らかとなっている。

③木器づくり（弥生前期～後期・古墳前・後期）

木製農具や木製高杯等の作りかけが出土したことから、ムラの中で木製品の加工を行ったことが明らかとなった。

花卉高杯…杯部外面に花卉をモチーフとした装飾を施した弥生時代後期の精製品である。出土例は少ないが、山陰と北陸において共通したデザインをもつ。

4. 交流のあかし

①分銅形土製品（弥生中～後期）

具体的な用途は不明であるが、祭祀遺物と考えられている。松原田中遺跡では合計 11 点という青谷上寺地遺跡に次ぐ出土量をみたが、分布の中心は、岡山県南部を中心とする吉備にある。いずれの地域でも大半が破碎・遺棄されるという同様の取り扱いがなされていることから、吉備と山陰東部で同一の祭祀行為が行われたと考えられる。



図4 山陰と北陸の花卉形高杯



図5 花卉高杯の分布図



図6 松原田中遺跡出土分銅形土製品

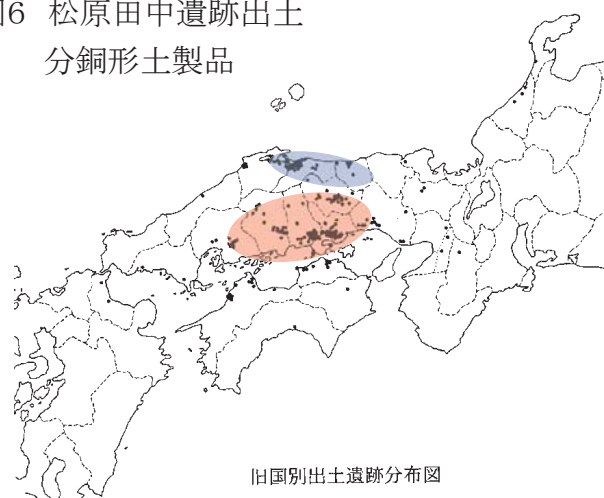
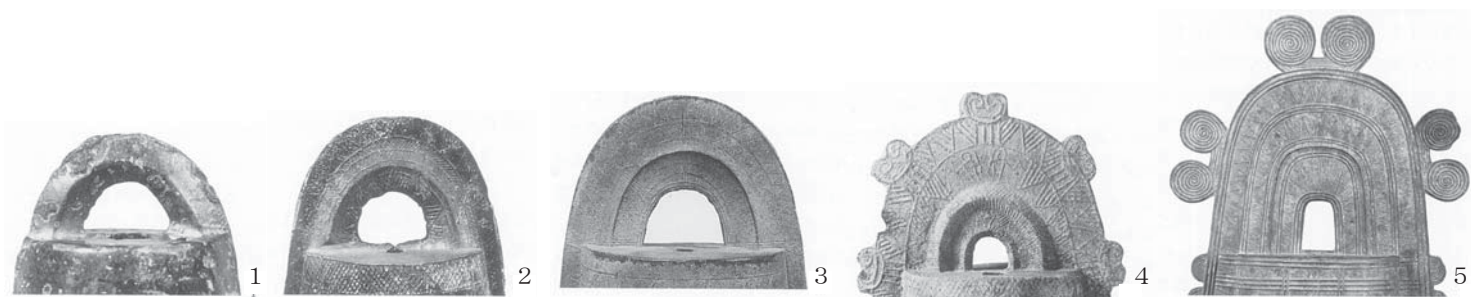


図7 分銅形土製品（円形タイプ）の分布

下澤公明2007「分銅形土製品再考」『古文化談叢』第58集より転載（一部加筆）



銅鐸の鈕の変遷

1. 菱環鈕式 出土地不詳銅鐸
2. 外縁付鈕1式 兵庫県中山1号銅鐸
3. 扁平鈕2式 伝播磨国銅鐸
4. 突線鈕1式 奈良県石上2号銅鐸
5. 突線鈕2式 京都府比丘尼城銅鐸

図8 銅鐸の変遷

井上洋一2003「銅鐸」『考古資料大観』6を一部改変

②銅鐸（弥生中期）

農耕祭祀に用いた青銅器である。出土した2点は同一個体の可能性があり、諸々の特徴から、外縁付紐2式か扁平紐式古段階の銅鐸の破片であり、本来は集落の一角に埋納されていた可能性がある。近隣でも高住銅鐸（扁平紐式）の出土例もあることから、集落内で銅鐸祭祀が執り行われた可能性は高いと考える。

③銅釧（弥生中期？）

青銅製の腕輪である。有鉤銅釧（ゆうこうどうくしろ）か、円環形銅釧の可能性はあるが、形態からみて、前者の可能性が高いと考える。しかし同様の形のもがないことから、今後の検討課題である。

④布掘建物（古墳前期）

検出した布掘建物 15 棟のうち 8 棟から地中梁が出土した。溝内に断面長方形の角材を立て置き、その上に下端をコ字形に抉りを入れた柱を落とし込むもので、不同沈下を防止のための工法と考えられる。出土遺物からみていずれも古墳時代前期のものである。同様の構造を持つものが北陸で数例見つかっている。ほぼ同時期の山陰東部と北陸において、低湿地における建物の工法の一つとして共通する点で注目される。

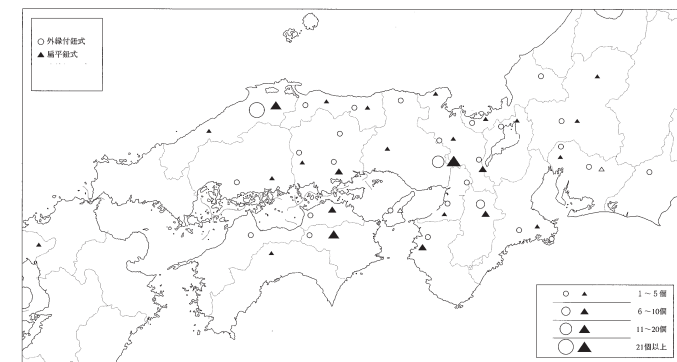


図9 弥生時代中期の銅鐸の分布図

井上洋一2003「銅鐸」『考古資料大観』6を一部改変

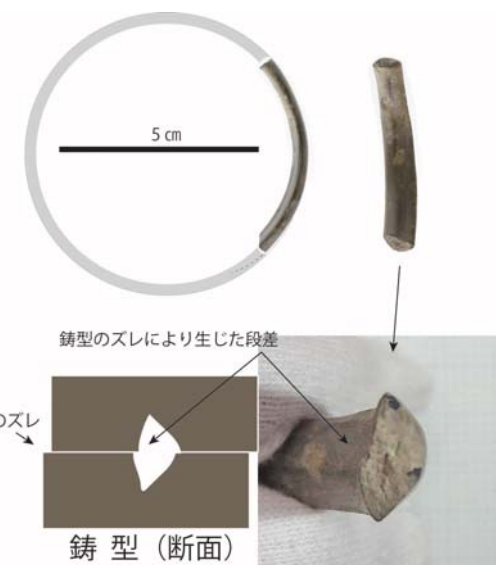


図10 松原田中遺跡出土銅釧片



図12 図11 松原田中遺跡出土の布掘建物と柱材